

【史料紹介】

三河国八名郡岡部落半原陣屋御用状留（十）

日本史学専攻近世近現代史ゼミ

今回からは、天保十四（一八四三）年の御用状留を史料紹介していく。藩主は十三代安部信寶<sup>のふたか</sup>で、前年十月前藩主信古<sup>のぶひさ</sup>が亡くなり、家督を継いだがわずか四歳であった。

まず、寛政三年（一七九一）・天保十四（一八四三）年の正月と同じ事項については、豊表替えや定例普請のための豊表や材木などの送付、陣屋奉公人への新年祝いとしての褒美下げ渡し、秋葉山への初穂金などの寄付と御札の貰い受け、浅見与兵衛や鶴飼島村新平からの借金の借戻（借り替え）、雑用金不足のため浅見与兵衛からの新たな借金などがある。ただし秋葉山への初穂金などについては、忌中につき保留している。

つぎに幕府との関係では、無宿・野非人の取り締まりにつき幕府からの問合書があり、元締の方でしっかり分析した上で、陣屋に連絡するとの伝えがあった。天保改鑄により文政金銀が停止されるが、この時期になっても引替が終わず、陣屋は元締を気遣っている。また、正月に前將軍家斉の娘泰姫<sup>やすひめ</sup>が亡くなり、その関係触も陣屋に届いている。

藩江戸屋敷と陣屋との関係では、まずは前藩主が亡くなり、幼い新藩主の後見人に鹿之助様＝安部信孝（信寶の大叔父、信古の叔父）がなったことが伝えられている。前藩主の百日法要を三河半原の洞雲寺でも行ったことも江戸へ伝えられている。なお前藩主の三十五日法要が済んだので、休日が与えられるのであるが、年末で忙しい時期であるという理由で、これを「代渡」＝金銭で貰うと、陣屋は返答している。その他、安部家が大坂加番を命じられたことにより臨時収入があったためであろう、陣屋役人らへも割増金が下されたよう、「時節柄」ありがたいと御礼を述べている。さらに陣屋役人へは御褒美金三百疋（銭三貫文、金三分）が下されている。

これからすると、藩財政は一応健全なのかと思われるが、そうでもなさそう、借財が高み、財政が差し支え、必至難渋であるので、この年春に財政改革に取り組むことになったという。その調査をするために、陣屋役人山本甚兵衛へ江戸に登るよう命じている。なお、陣屋の財政についての調査をするよう命じているのであるが、これについて事細かな指示をしている。また江戸出府に際し、土産物の持参を固く禁じてもいる。

最後に、藩・陣屋と三河領内支配村・村人との関係では、賀茂村の村人が火事によって拝借金をしたのであるが、その元金返納を延期したいという願が許可され、村人が陣屋に御礼に来ている。また、新藩主の家督相続が無事行われたことに対して村の重立った人々が陣屋へお祝いに来ている。下宇利村喜兵衛に盗賊が忍び入ったので、紛失届が出されているが、当事者は取り調べを願っていない。そのほか賀茂村出大坂御奉公人近藤才治の退職願や老齢による中宇利村の村役人交替願も出され、前者は認められている。

本史料は、新本大樹・今溝綾乃・小林万里子・佐々木梨奈・服部祐里香・藤井悠美・藤田裕夢・藤本若菜・細田明日香が史料翻刻と説明文執筆のための資料調査・草稿作成を行い、史料翻刻の点検および説明文草稿のとりまとめと

最終執筆を神谷智が行った。

〔表紙〕  
天保十四年

御元締衆御用状留

癸卯正月 年番  
高橋忠右衛門

列巻番

改年之御慶不可有盡期御座候。殿様益御機嫌能被成御超歳、恐悦至極奉存候。當御領中御陣屋向都而相替儀無御座候。

一、舊臘<sup>者</sup>御地別<sup>而</sup>御用多可被成御入之處、万端無御滯相済可申、目出度奉存候。當表<sup>二</sup>而も押迫迄、無滯相仕舞申候。

一、舊臘廿六日付御地拾五番御用状、去ル四日到来致拜見候、先以

殿様益御機嫌能被成御座、恐悦御同意奉存候。

一、従是旧臘差立候拾五番・拾六番御用状、追々相達被成御披見、貴報被仰聞候趣致承知候。事済候儀<sup>者</sup>再貴報致文略候。

一、右便無宿・野非人共取計方之儀<sup>一</sup>付、御問合書老冊御落手被下、右<sup>者</sup>篤<sup>与</sup>御取調之上、次便可被仰下由。

一、右便差出候浅見与兵衛去暮御借戻金三百兩證文、鶺飼島村新平今御借戻金五拾兩證文、<sup>并下シ</sup>金式百六拾兩差

出證文とも、<sup>メ</sup>三通御落手之上、御年寄衆御證印済、御返却被下、宜取計可申旨致承知候。

一、右便井戸堀替伺書<sup>并</sup>御臺所量表・薄縁御入用伺書、大黒講御勘定組窺書とも、都合老通式冊致進達候義<sup>二</sup>付、委

細得貴意候趣御承知被下、右<sup>者</sup>御落手之上、御年寄衆御聞済之御證印済、御返却被下、夫々致落手候。

一、右便賀茂村類焼人拜借金年延願之義<sup>三</sup>付、得貴意候趣委細御承知被下、右<sup>者</sup>願之通聞濟遣、宜取計可申旨致承知候。

一、右便差出候浅見与兵衛渡引當米切手三拾六枚、御調印濟返却被下、宜取計可申旨致承知候。

一、殿様御幼年<sup>二</sup>付御後見之義鹿之助様御引受<sup>三</sup>付御書付<sup>一</sup>老冊、并<sup>二</sup>御加番<sup>三</sup>付御割増金被下方被 仰出御書付<sup>一</sup>老冊、式冊、御年寄衆御渡被成候<sup>二</sup>付被遣之候間、落手可致旨致承知、則致落手候。

一、御加番御増金被下方仕出帳老冊被遣之、宜取計可申旨致承知、則致落手候。

一、義徳院様御三十五日御取越<sup>三</sup>付、尚<sup>（金銀紙）</sup>御陣屋詰下々迄御非時被下候間、御地<sup>二</sup>而被下方御別昏書付被遣之、且年内余日も無之義<sup>二</sup>付、代渡<sup>二</sup>取計候<sup>而</sup>も不苦、両様之内宜取計可申旨致承知候。

一、賀茂村出大坂御奉公人才治義<sup>二</sup>付、得貴意候趣御承知被下、右委細之儀<sup>者</sup>渡辺万右衛門<sup>〇</sup>懸合可有之候間可致承知旨<sup>〇</sup>被仰聞

〇致承知候。則万右衛門<sup>〇</sup>欠合之趣致承知候。

一、御停止引替金之儀<sup>（<sup>2</sup>）</sup> 未引替相濟不申候間、何れ當春引替濟之上、否可被仰聞旨致承知候。

右<sup>者</sup>舊臘御地拾五番御用状貴報<sup>二</sup>御座候。御入記之通致落手候。

一、前条浅見与兵衛 并<sup>者</sup>鵜飼嶋新平<sup>〇</sup>御借戻金證文式通、下シ金差出證文共<sup>〇</sup>三通、御年寄衆御證印濟被遣之致落手、則書替證文式通之儀<sup>者</sup>古證文引替、今便為御消印致進<sup>達</sup>候。御落手宜御取計可被下候。

右之通相認候得其、鵜飼嶋新平渡證文未引替相濟不申候間、追引替差立可申、左様御承知可被下候。

一、前条賀茂村類焼人拜借金返納元金年延願御聞濟之趣被仰聞候<sup>二</sup>付、則村役人呼出し申渡候処、難有仕合奉存候旨御札申之、則返納殘金廿七両之利足金式両式分式朱<sup>（前息）</sup>・永七拾五文相納候<sup>二</sup>付、今便差立申候間、御落手宜御取計御納可被下候。尤右之内金式両式分式朱<sup>二</sup>而差立、端永錢四百九拾老文<sup>〇</sup>者<sup>〇</sup>之義御賄中<sup>〇</sup>上納之積及欠合候間、同人<sup>〇</sup>落手可被下候。

一、前条浅見与兵衛渡引當米切手三拾六枚、御調印濟被遣之致落手、則古切手引替、今便為御消印差立申候。御落手宜御取計可被下候。

一、前条御加番<sup>二</sup>付、<sup>〇</sup>原<sup>以</sup>思<sup>召</sup>不存寄御増金被成下、御時節柄別<sup>而</sup>難有仕合奉存候。

一、前条御加番御増金被下方仕出帳耆冊致落手、則御割付通夫々相渡申候。小役人一同難有仕合奉存候旨御礼申出候。尤右御割付帳<sup>ニ</sup>山本順次<sup>江</sup>被下方御調落相成、其外安形源藏・安形忠藏・安形彦兵衛之分、高相違いたし候<sup>ニ</sup>付、右御割付帳に習ひ、別段仕出相渡申候。依<sup>而</sup>別紙仕出帳差出候間、御落手御披見之上、若相違も御座候ハ、宜御差圖可被下候。

一、前条

義徳院様御三十五日御取越<sup>ニ</sup>付、御非時被下之儀、代渡<sup>ニ</sup>取計、下々迄一統難有致頂戴候。尤諸士耆匁五分ツ、小役人耆匁ツ、御足輕・御中間・七分五<sup>厘</sup>りツ、被下取計申候。浅見与兵衛<sup>江</sup>も諸士并頂戴為仕候。左様御承知可被下候。

一、前条御停止金引替<sup>未</sup>相成<sup>濟</sup>不申候由、右様引替濟延引可致<sup>与</sup>ハ不存、為替同様取計、嗚々御不都合之義<sup>与</sup>奉恐入候。

一、例年之通、當御領分御用働・御金用働・其外他御金主向<sup>并</sup>御出入之者<sup>江</sup>被下物窺書取調、本紙写共今便致進達候。御落手委細<sup>者</sup>書面<sup>ニ</sup>而御承知被下、宜御取計御消印濟被遣可被下候。

一、例年春當御陣屋御奉公人御褒美被下窺書取調、今便本紙写共致進達候。御落手是又御披見之上、宜御取計、御消印濟被遣可被下候。

一、例年遠<sup>召</sup>秋葉山<sup>江</sup>御足輕使を以、御初穂金<sup>并</sup>小札料とも相納、大小御札御地<sup>江</sup>差立候得共、當年<sup>者</sup>御服中故、先見

合置申候。右者如何取計可申哉、御問合申候。次便否被仰下へ候。

一、古御作事方近藤才治義、旧臘廿七日願之通御暇申渡、同廿九日宅江引取申候。左様御承知可被下候。

一、鶉飼嶋・江村・御園三ヶ村納残内借之分、旧臘十五日不残皆濟相成申候。左様御承知可被下候。

一、殿様御儀旧臘廿四日

御家督被為濟候段、御年寄衆分致承知、御同意恐悅至極奉存候。右之段去十三日御遠慮明之上、御領中江相觸候処、

村々役人御并御用働・御金用勤之者共、其外寺社之面々追々為恐悅罷出申候。此段御承知可被下候。

一、尚御陣屋御奉公人一同、右恐悅至極奉存候旨、拙者共迄申出候。此段御承知可被下候。

一、旧臘御積金分御借戻金七百三拾兩書替證文并右御積金之内端金之分當御役所御雜用江御借入取計候二付證文老通式通、写相添今便致進達候間、御落手宜御取計可被下候。右二付古證文三通為御消印致進達候。是又宜御取計可被下候。

一、右御積金仕訳書老冊并右御積金之内林賀茂村林徳左衛門・林徳右衛門兩人江御貸付取計候二付、同人分差出候百拾兩證文老通、今便為御一覽差立候。御落手宜御取計被下、右證文之義者御一覽相濟候ハ、御返却可被下候。

一、旧臘十三、四日頃、下宇利村百姓兵衛方江盜賊忍入、紛失物有之候段届出候間、右届書写今便致進達候。御落手委細者書面にて御承知被下、宜御取計可被下候。尤御吟味等者不奉願趣二付御坐候。左様御承知可被下候。

一、高橋忠右衛門江當年月渡并盆暮渡方之儀、昨年御問合得貴意候処、書付を以被仰下、委細致承知、此節取調候処、右御割合之儀、何割之御借米懸り候哉、相分兼候間、乍御面倒今一應何割之御借米懸候何程渡与申義御取調、次便委細被仰下候様致度奉存候。右者山本甚兵衛・橋本亦兵衛江御借米懸方与ハ相違之様も存候間、此段御問合得貴意候。

一、右之通相認候所、御表去ル六日付老番御用状相達致拜見候。先以

殿樣益御機嫌能被成御座、恐悅御同意奉存候。

一、旧臘者別而御用多之處、無滯仕廻舞候義与思召被下候段被仰聞、忝奉存候。御表之儀別而御用多之處、押詰迄ニ無御滯御仕廻被成候旨致承知、目出度奉存候。

一、泰姬君樣被遊、御逝去候ニ付御觸書書写三耆冊、御年寄衆被成御渡候ニ付被遣之候間、落手宜取計可申旨被仰聞致承知候。

一、兼而承知致し候通、御表并御領分向共追々御借財相高、御勝手向御差支必至之御難渋ニ付、當春都而御改正御取メニ相成候。右御調為御用、甚兵衛義此度出府被仰付候。依之當春諸御借財向并御積金等ニ至迄明細ニ取調、御陣屋御入用向等も同様取調之上、帳面ニ相仕立、其節持參可致。并御借財之内、年賦濟又者利足分下ケ等ニ相成候而可然口々、且御陣屋諸御入用之内相減候而宜分、其外心付之儀并評儀相談之上是又取調、右書類持參可致旨被仰聞致承知候。且出府日限之儀者来月中旬迄ニ御地着可致旨被仰聞、是又致承知候。

一、右出府ニ付、都而土產物之儀堅持參致間敷旨被仰聞致承知候。

一、前式ケ条之儀、御自分様分可被仰聞旨、御年寄衆御達ニ付、被仰聞候条左様承知可致旨被仰聞致承知候。

右者去ル六日付三番御用狀貴報ニ御座候。御入記之通り受取申候。

一、前条御觸書写三耆冊、御元メ衆より到来致落手候。則例之通取計御領中へ相觸申候。

一、前条御勝手御用向ニ付、山本甚兵衛此度出府被仰付候ニ付、取調持參可致品々被仰聞候趣致承知候。右者被仰聞ニ隨ひ取調持參可致候。且又出府日限之儀、是又被仰聞候趣致承知候。支度整次才出立日限之儀委細可得貴意候。左様御承知可被下候。

一、右出府<sup>ニ</sup>付、土産もの堅持參致間敷義被仰聞候趣致承知、被仰聞<sup>ニ</sup>随ひ可申候。

一、舊臘廿八日之御奉書を以拙者共御褒美御目録金三百疋ツ、拝領仕、冥加至極難有仕合奉存候。此段御吹聴得貴意候。  
且又山本順次義右同断<sup>ニ</sup>付、御目録金百疋頂戴被下置候。右何れも例之通り、御雜用金之内を以頂戴致し候。左様御承知可被下候。

右之段為可得貴意、如斯<sup>ニ</sup>御座候。以上。

卯正月十五日

高橋忠右衛門

橋本亦兵衛  
山本甚兵衛

石川清兵衛殿

入記

一、御消印<sup>ニ</sup>可相成古證文

内

四  
五通

浅見与兵衛三百両之分

壹通

鵜飼寫村新平五拾両之分

壹通

是ハ追<sup>而</sup>差立可申候。

御積金之内三百両之分

壹通

右同断四百三拾両之分

壹通

右同断五両・永七拾文余之分

壹通





一、浅見与兵衛三百両ノ御引當米切手御消印もの 三拾六通

一、金貳両貳分貳朱也 壹包

一、御加番ニ付御増被下方仕出帳 壹冊

一、御用働・御金用働・其外共被下もの伺書本紙写共 貳冊

一、御陣屋御奉公人へ被下物右同断 [壹通] 壹冊

一、御積金仕訳書 壹冊

一、右同断御借入七百三拾両證文本紙写 [壹通] 壹冊

一、右同断八両・永六拾文余之證文本紙写 [壹通] 壹冊

一、下字利百姓<sup>村</sup>兵衛紛失物届出書写 壹冊

一、御積金之内林徳左衛門・林平八へ御貸附證文 壹通

一、御自分様へ拙者共今内状 壹通

卯貳番

以飛札致啓上候。先以

殿様益御機嫌能被成御座、恐悦御同意奉存候。當方都<sup>而</sup>相替儀無御座候。

一、山本甚兵衛義追々支度相整候ニ付、来ル七日當御陣屋出立、東海道通り罷下り申候間、道中無滞候ハ、来ル

十三日御地着可致候間、左様御承知可被下<sup>■</sup>、弥着之上<sup>者</sup>万端御世話<sup>ニ</sup>相成可申。何分宜敷被仰合可被下候。此段奉頼上候。

一、旧年御懸合御座候量表之儀、其筋へ問合候所、直段も餘り高<sup>(徳)</sup>も無御座哉<sup>ニ</sup>被存候間、則諸目式百枚、琉球百五拾枚、三百五拾枚御買上ケニ取計、去月廿六日津出致し候間、送状写耆冊御賄中へ差遣し候間、同人分御承知可被下候。右御買上直段、左之通り。

一、銀四百式拾八匁六分 諸目式百枚 但拾枚ニ付、廿一匁四分三リツ、

一、銀式百八拾五匁 琉球百五拾枚 但拾枚ニ付、拾九匁ツ、

右之通<sup>ニ</sup>御座候。左様御承知可被下候。将亦家根板三両分、是又御買上ケニ取計、右量表一同津出し致し候。尤<sup>尠</sup>兩<sup>ニ</sup>付式拾八把替<sup>ニ</sup>付、三両分八拾四把<sup>ニ</sup>御座候。此段御承知可被下候。

一、右之外板類角物<sup>并丸太等</sup>御注文<sup>ニ</sup>付、右委細之儀<sup>者</sup>山本甚兵衛無程出府之上御咄し可申候間、左様御承知可被下候。

一、御雜用金御不足<sup>ニ</sup>付、正月中浅見与兵衛分金五拾兩御借入<sup>ニ</sup>取計申候。此段御承知可被下候。右同人渡證文取調、本紙写共致進達候。御落手御調印之上、御年寄衆御證印御取被遣可被下候。

一、義徳院様 御百ヶ日御取越、正月十八日於洞雲寺、御先格之通御法事執行御座候<sup>ニ</sup>付、御先例<sup>ニ</sup>付、御茶湯料金三百疋相備<sup>(徳)</sup>之、為拜礼拙者罷越<sup>共</sup>、無滞相濟申候。右御茶湯料御勘定組伺書本紙写共式冊、今便致進達候。御落手宜しく御取計、御證印濟被遣可被下候。

一、中宇利村庄屋清吉追々老衰<sup>ニ</sup>付、庄屋役 御免被成<sup>下</sup>度旨願書差出し申候<sup>ニ</sup>付、承糾し候処、申立候通無據相聞へ申候間、願候通被仰付候<sup>而</sup>、同人悴庄屋見習相勤居清四郎へ本役被仰付可然奉存候。此段相伺申候。

一、右同村之儀、一体庄屋三人之村方ニ御座候所、是迄<sup>本役</sup>兩人ニ見習老人ニ而相勤来り候所、右之通り清吉退役、悴操上ケ本役被 仰付候義、尚又庄屋見習老人被仰付候様致し度、右<sup>同村百姓孫平申もの</sup>御金用勤惣八悴竹三郎、至極実体成ものニ御座候趣相聞へ候間、此ものへ被仰付可然奉存候。如何取計可申哉、相伺申候。

一、先得得貴意候鵜飼寫新平分御借戻し金書替證文引替濟ニ付、古證文壹通為御消印今便差立申候。御落手宜敷御取計可被下候。

右之段為可得貴意、如此御座候。以上。

卯二月三日 右三人

石川清兵衛殿

入キ

一、御雑用金御借入金證文本紙写 「壹通」

一、御茶湯料御勘定組伺書本紙写共 貳冊

一、鵜飼寫村新平古證文御消印物 壹通

註

(1) 石井良助・服部弘司編『幕末御触書集成 第五卷』(岩波書店、一九九四年)、史料番号四七六七・四七六八。

(2) 『同 第四卷』(岩波書店、一九九四年)、史料番号四一一六。

(3) 『同 第二卷』(岩波書店、一九九四年)、史料番号一一〇〇。